

インターネットと宗教

宮田加久子

昨年末の「インターネット青酸カリ自殺事件」以来、インターネットが麻薬や銃から自殺情報まで何でも手に入る無法地帯のような印象を受けている人もいないだろうか。

インターネットはもともと軍事用として開発され、研究用を経て、民間に解放されたコンピュータ・ネットワークであり、自宅や職場のパソコンを電話回線等につなぐことで、どこにいてもいつでも電子メールが交換できたり、電子掲示板やニュースグループ、チャット、メーリングリストに匿名で意見を書き込み議論したり、ホームページに自分の写真や意見等を掲載することができる。このように、どこからでも誰でもが不特定多数の人々との間でいつでも双方向コミュニケーションができる点がインターネットの特徴であり、インターネットを通じて、今までは得にくい情報を獲得したり、不特定多数の人々に対して自己呈示をしたり、従来の地縁・血縁・職場縁を越えた新しい人々と対人関係を形成し、お互いに情報交換することでサポートしあうことができるようになったのである。

このインターネットと宗教の結びつきを私たちにはっきりと見せつけたのが、1997年に集団自殺をした米国カルト集団ヘブنز・ゲートであろう。彼らはホームペー

ジを作成する会社を運営し、かつそれを足がかりにして勧誘活動を行っていた形跡があったという（オウム真理教も同じような行動をしている）。また、島菌進によれば、神秘的な体験を通じた癒しや自己変容の強調を特徴とし、新たな「霊性」の覚醒が新たな文明の創造に結びつくような緩やかな枠組みの「新霊性運動」が世界共通に見られると言うが、インターネットではカルト集団だけではなく、これらの運動に関連するホームページも多く見られる。

もちろん、インターネットがわけの分からない危険な新しい宗教運動を起こしていると短絡的に言うわけではない。しかしながら、カルト集団やこれらの宗教運動にとって、インターネットは魅力的なメディアであることは間違いない。

第一に、ホームページを見る場合、利用者はホームページのある場所を調べるか、リンクをたどっていくという「自分で探す」と言う主体的行為が必要になる。したがって、もともとホームページの内容に興味がある人がホームページを見る傾向が高く、興味がない人に比べて説得されやすい。たとえば、あるカルト集団を全く信じていなかった人が偶然ホームページを見たから改宗するわけではないが、もともと関心を持っている人が主体的に情報獲得する場合には、マインド・コントロールを受けるようになるきっかけを作る効果はある。

第二に、インターネットでは信

じる者同士の共同体を現実のものとするができる。たとえば、今までは社会に埋もれていて見つけだしにくかった自分と同じ神秘体験をした人やそれを信じる人がインターネット上で集まることで、リアリティを持つようになり、信じる気持ちを強めることになる。

では、これらのカルト集団や新霊性運動に対抗するためには、何ができるのだろうか。脱会信者や弁護士、さらには宗教団体などの反カルト組織が啓蒙活動やカウンセリングのために開設しているホームページにアクセスするのも一つの方法であろう。だが、最も重要なことは、インターネット利用者が、「誰がどのような意図で発している情報なのか」、「信じるに足るものなのか」を判断をするリテラシーを身につけることである。そして、学校には、単に学校でインターネットに接続できるようになることではなく、こういったリテラシーを育てる教育こそが求められるのではないだろうか。

（みやた かくこ

所員、社会学部教授）